



Title	【定年退職教授の履歴および主要業績】志村剛教授
Author(s)	
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2017, 43, p. 261-266
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/60577">https://hdl.handle.net/11094/60577</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 【定年退職教授の履歴および主要業績】

志　村　　剛　　教授

し　　むら　　つよし  
志　　村　　剛　教授

- 1980年11月 大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程退学  
 1980年11月 大阪大学人間科学部助手  
 1991年2月 学術博士（大阪大学）  
 1995年5月 大阪大学人間科学部講師  
 2000年4月 大阪大学大学院人間科学研究科助教授  
 2007年4月 国立大学法人大阪大学大学院人間科学研究科教授  
 2017年4月 大阪大学名誉教授

志村剛教授は、1976年3月大阪大学人間科学部を卒業、1980年11月大阪大学大学院人間科学研究科博士・後期課程退学後、1980年11月大阪大学人間科学部助手に採用され、1995年5月同講師、2000年4月同助教授を経て、2007年4月大阪大学大学院人間科学研究科教授に昇任となった。人間科学部では行動生理学講座、人間科学研究科では行動生態学講座行動生理学研究分野を担当して、大阪大学及び同大学院人間科学研究科・人間科学部の発展に尽力し、2017年3月31日限り定年退職するものである。

人間科学部創設の第一期生として入学・卒業を経て、人間科学部の発展とともに歩む中で、人間科学部及び人間科学研究科の助手・講師・助教授・教授として教育・研究に情熱を注ぎ、傑出した業績を挙げた。また、学会に広く影響を及ぼすと共に、門下から優秀な人材を多数輩出し、人間科学部及び人間科学研究科の発展に大きく寄与した。さらに、学内委員として、大学教育実践センターカリキュラム委員会、入試委員会、環境安全委員会などの委員に任せられ尽力するとともに、長期にわたり科学教育機器リノベーションセンター運営委員会委員、動物実験委員会委員、遺伝子組換え実験安全委員会委員などを務め、学内の研究基盤の整備充実に力を注いだ。人間科学研究科部内委員としても施設マネジメント委員会や附属比較行動実験施設運営委員会をはじめとして多数の委員会委員を歴任し、また、附属比較行動実験施設長も務めることで、人間科学部及び人間科学研究科の運営にも大きく貢献した。

同教授の研究活動は多岐にわたるものであり、それは事象関連電位を用いたヒト認知機能の生理心理学的な研究から始まったが、研究対象を動物へと広げて、繁殖・養育行動における脳基盤の実証科学的な解明へと挑戦し、多くの著明な成果を得た。その後、一転して味覚関連行動・食行動の神経機構の解明へと研究テーマを移したが、その研究でも数々の成果を挙げた。後者の2つの研究課題では一貫して動機づけ行動の脳制御機構の解明という視座に基づいて行われたものであり、動機づけの神経機構の研究において世界をリードする研究成果として知られている。主な研究テーマは同教授の主な研究歴を当初から現在までにまとめると以下のとおりである。

1. 認知に関する事象関連電位の脳機序に関する生理心理学的研究

本邦における脳波の事象関連電位を用いた認知研究の創生に寄与した。

2. 繁殖・養育行動の脳内機構における電気生理学的研究

繁殖行動を調節する脳機構の神経生理学的な研究に取り組み、当時では類を見ない脳内神経活動と行動との連関について先駆的な研究成果を挙げた。

3. 中枢神経系における味覚記憶の情報処理機構の電気生理学的研究

味覚記憶の獲得とその脳内情報処理に関わる神経活動を電気生理学的手法による研究にて明らかにした。

4. おいしさ・まずさ、好き・嫌い、食行動に関する脳機序の解明

食行動を調節する重要な要因である味の嗜好性・嫌悪性が脳内報酬系神経回路の働きに基づくものであることを見出し、さまざまな脳内物質が味覚を媒介とした食行動の調節にどのように関わっているかを明らかにした。

これらの研究は 13 冊の著書、多数の国際学術誌や和文の専門雑誌に学術論文として掲載され、人間科学、神経科学、食行動学やその他関連分野の研究者から高い評価を受けている。繁殖行動に関する脳内機構の研究成果は、現在でも、その研究テーマに従事する多くの研究者に広く知られているものである。味覚研究から得られた成果も多くの学術論文から引用されるものである。特筆すべきは、味覚・食行動研究の大家である R. Norgren 教授 (Pennsylvania State University) の研究室に研究員として滞在した一年間 (1991 年 10 月 1 日から 1992 年 9 月 30 日まで) にて得られた研究成果が、国際学術誌に掲載された 4 報の論文として公刊されていることである。これらの成果は、同研究室を含めた海外研究者からも同教授の研究が国際的にも高く評価されていることの証左となっている。

学会活動では、日本生理学会評議員と日本味と匂学会評議員を長きにわたり務め、両学会の発展に寄与した。また、日本味と匂学会の 1992 年大会準備委員長として同大会を成功裡に開催することに尽力した。その後、2000 年から 6 年間、日本味と匂学会での学会運営業務に従事し、同学会の主催にて開催された、2004 年の第 14 回嗅覚・味覚国際シンポジウム (ISOT 2004) では事務局長として、国際会議の円滑な開催のために手腕を発揮した。また、そのほか多数の学会の運営にも参与しているが、2007 年 3 月に開催された第 84 回日本生理学会大会 (大阪市) の運営に関して事務局長として中心的役割を担い、広く基礎医学系学会の発展にも貢献している。さらに、千里ライフサイエンス振興財団研究助成選考委員として多くの若手研究者への助成事業にも尽力することで学内外の学術振興にも寄与した。

以上、同教授は大阪大学人間科学部及び大阪大学大学院人間科学研究科における教育と研究を通じて、その充実と発展に寄与するとともに、繁殖行動・養育行動・食行動に

における行動神経科学の発展や隣接領域における諸学会の活動・運営にも参画し、学術振興への寄与は大きく、多数の講演等を通じて広くその成果を社会に発信してきた。

### 主　要　業　績

#### 著書

1. 志村剛 (1997) 神経科学・栄養生理の観点から 食行動の心理学, 今田純雄(編) 現代心理学シリーズ 16, 培風館 pp. 20-40. 1997年12月
2. 志村剛 (2004) 味覚における性差 味のなんでも小事典 日本味と匂学会(編) 講談社 pp. 204-207. 2004年4月21日
3. 志村剛 (2006) 新・行動と脳 侯野彰三・遠山正彌・塩坂貞夫(編) 大阪大学出版会 pp. 253-278. 2006年12月10日
4. Yamamoto T, Shimura T. (2008) Roles of taste in feeding and reward. In: Allan I. Basbaum, et al. (eds.) *The Senses: A Comprehensive Reference*, Vol. 4, *Olfaction & Taste*, Stuart Firestein and Gary K. Beauchamp (eds.), San Diego: Academic Press. pp.437-458. 2007年12月20日

他9冊

#### 学術論文

1. Horio T, Shimura T, Hanada M & Shimokochi M. (1986) Multiple Unit Activities Recorded from the Medial Preoptic Area during Copulatory Behavior in Freely Moving Male Rats. *Neuroscience Research* 3, 311-320 (査読有り) 1986年5月
2. Shimura T & Shimokochi M. (1990) Involvement of the lateral mesencephalic tegmentum in copulatory behavior of male rats: neuron activity in freely moving animals. *Neuroscience Research* 9, 173-183 (査読有り) 1990年12月
3. Yamamoto T, Shimura T, Sako N, Yasoshima Y, Sakai N. (1994) Neural substrates for conditioned taste aversion in the rat. *Behavioural Brain Research* 65, 123-137 (査読有り) (招待論文) 1994年12月
4. Tokita K, Karadi Z, Shimura T, Yamamoto T. (2004) Centrifugal Inputs Modulate Taste Aversion Learning Associated Parabrachial Neuronal Activities. *Journal of Neurophysiology* 92, 265-279 (査読有り) 2004年2月
5. Shimura T, Imaoka H, Yamamoto T. (2006) Neurochemical Modulation of Ingestive Behavior in the Ventral Pallidum. *European Journal of Neuroscience* 23, 1596-1604 (査読有り) 2006年3月

6. Inui T, Inui-Yamamoto C, Yoshioka Y, Ohzawa I, Shimura T. (2013) Activation of efferents from the basolateral amygdala during the retrieval of conditioned taste aversion. *Neurobiology of Learning and Memory* 106, 210-220 (査読有り) 2013 年 11 月

他 70 報